

旧約聖書 イザヤ書49章1－7節

使徒書 コリントの信徒への手紙一1章1－9節

福音書 ヨハネによる福音書1章29－41節

本日の旧約日課も先週と同じイザヤ書です。49章は「主の僕」、ことにその使命について記しています。この「主の僕」が誰であるかは明確ではありません。先週の箇所では、一個人のようにでしたが、本日の箇所では、「**主は私に言われた。『あなたは私の僕、イスラエル。私はあなたの中で私の栄光を現す。』**」(49:3)とある通り、イスラエル全体のように記されています。ここでは、「主の僕」が全体として何を意味しているかを学びます。

49章1から2節は、「主の僕」の召命について記しています。「主の僕」は、「**主は母の胎にいる時から私を呼び、母の腹にいる時から私の名を呼ばれた**」とある通り、生まれる前から召されていたのです。この箇所と似た表現が、イザヤ書44章2節、24節にもあります。49章1節前半の「**島々よ、聞け。遠い国々の民よ、心して聞け**」は、その召命が世界に向けて告知されるべき事柄であることを示し、2節の「**主は私の口を鋭利な剣のようにして、私を御手の陰に隠し研いだ矢としてご自身の矢筒の中に隠された**」は、その告知が「主の僕」を通して、厳密に行われるべきことを示しています。

イザヤ書が書かれた時期から考えますと、その告知によって期待される事柄は、バビロン捕囚からのイスラエルのエルサレム帰還です。言い換えればイスラエルの回復です。しかし、4節を見ますと、「**しかし、私は言った。『私はいたずらに労苦し、意味もなく、空しく力を使い果たしました。それでも、私の公正は主と共にあり、私の報酬は私の神と共にあります。』**」とあり、直接的表現ではありませんが、イザヤ書35章1～4節にあるような、イスラエルの回復の預言がなかなか実現しないため、「主の僕」は嘆いているのです。そこに現れているのは、主なる神様に召された「主の僕」であっても、人間的視点でその使命を間違えてしまうということです。

しかし、主なる神様は、答えます。「**主は言われる。『あなたが私の僕となって、ヤコブの諸部族を立たせ、イスラエルの生き残った者を連れ帰らせるのは、たやすいこと。私はあなたを諸国民の光とし、地の果てにまで、私の救いをもたらす者とする。』**」(49:6)。この節は二つのことを記しています。一つは、前半部分にある事柄で、主なる神様にとって、イスラエルのバビロン捕囚から解放・エルサレム帰還は簡単だということです。しかし、それが「主の僕」が召された目的ではないのです。もっと重要な事柄があり、それが、後半部分、「主の僕」であるイスラエルが諸国民の光として救いを地の果てまで至らせることです。

7節は、「主の僕」がどのような形で、その使命を果たすかを示します。前半では「**イスラエルの贖い主、聖なる方である主は、人に蔑まれている者、国民に忌み嫌われている者、支配者らの僕に向かって、こう言われる**」とあり、主の僕の使命の担い方は、決して、強く、高く、美しい存在としてではなく、むしろその逆です。「蔑まれ、忌み嫌われる」ような存在であるあり方を通して、それを実行すると語られます。そしてそうであるがゆえに、「**王たちは見て立ち上がり、高官たちはひれ伏す。真実であり、イスラエルの聖なる方である主が、あなたを選んだ**」ことに気付くと断言です。

「主の僕」とイスラエルの回復に関する預言は、49章の終わりまで続きますが、聖

書日課の箇所から「主の僕」について二つのことを学びます。

一つは、主なる神様が「主の僕」に与えた使命です。それは、「主なる神様の救いを地の果まで至らせる」ことです。創世記冒頭にある通り、主なる神様は、神の像として人間を創造されました。それゆえに、「主の僕」の使命とは、その創造主である主なる神様にまことの救いがあると、全ての世界にもたらすことです。その使命は民族・国家を超えるものです。なぜならば、「主の僕」をイスラエル全体、歴史的個人、どのようにとらえたとしても、召された方が天地を創造された方だからです。召命も告知もイスラエルという存在を通して行われるのですが、すべての枠組みを超えるのです。

二つ目は、その使命をどのようなあり方の存在が担うか、ということです。それは人々から侮られ忌み嫌われる者です。そこにあるのは逆説です。主なる神様の思いは、人間の知恵・思いと異なるからです。「主の僕」であっても目の前にあるバビロン捕囚からの解放を期待していました。しかし、主なる神様は、自分たちの願い通りに主なる神様の業が現われないと考える信仰者に、まことの信仰への問いを起こさせます。そして、その意思を伝えるのです。

さて、本日の福音書は、ヨハネ福音書独特のお話です。洗礼者ヨハネがイエスを見て、「**見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ**」と発言し、「**この方こそ神の子であると証し**」する箇所です。ヨハネ福音書は、このようにイエス様と洗礼者ヨハネとの出会いを独特な形で示します。イエス様の洗礼自体の出来事を記述せず、洗礼者ヨハネがイエス様について何を明らかにしたのかを示すのです。言い方を変えれば、洗礼者ヨハネの存在意義は、イエス様に洗礼を授けたか否かではなく、イエス様を「ヨハネより勝る方」「先におられた方」「聖霊によって洗礼を授ける方」「神の子である方」と証しすることです。このヨハネの証は、イスラエルのヨルダン川におけるヨハネの洗礼活動の時期の出来事という、時間も空間も限定された事柄でありながら、時間も空間も超えた救いに関する事柄を語っています。この世界の初めに主なる神様とともにおられたイエス様に対する告知であるからです。

続くお話で、ヨハネの二人の弟子たち（一人はシモンペトロの兄弟アンデレ）がイエスに従っていきます。のちにペトロも従いますが、それはマルコ福音書にあるような理由のない召命と信従ではありません。時間も空間も超えた召命に出会ったからです。言い換えれば、この地上の召命なのですが、地上の事柄ではなく、新しい世界への召命を受け、従ったということです。それは、地上の「主の僕」を語りながら、すべてを超えた救いを語るイザヤ書と同じといえます。

本日のイザヤ書とヨハネ福音書は、イエス様によってもたらされた「救い」とそれを「信じる」ことに関して、大切な事柄を示します。何かを「信じる」ことの強調は、時として異文化・他宗教・他者の意見への否定へつながります。しかし、「主の僕」とヨハネ福音書が語る「信じる」ことは、そうではありません。「主の僕」が示すのは、最初からある事柄への、ヨハネ福音書の表現でいえば、新しい時間と空間を超えた、イエス様による「信じる」世界への導きです。その意味でことにヨハネ福音書が示す世界は、常に現在に開かれた世界なのです。

教会もわたしたち一人ひとりも、新しい年・年度を迎えた、という時間線の中で生きています。その新しい年にも世界には争いがあり、個人の苦悩も悲しみがあります。しかし、イエス様を「信じる」時、わたしたちは、それらを超える信仰の世界にも生きています。そのことを改めて確認し、まことの平和へとつながる歩みを創造し続けたいと思います。